籬乃梅

二編上

へ13
2919
4

序

春告鳥は花に音を尋ねて
現ぐ垣根の傳へ
雷をめざして甚きも
遠くの木ずゑ
彼岸にうみて
山路なりも前輯より

門へ13
2919
巻 4
昭和九年七月六日

如水上自
籬の梅別傳

春色梅の園 全本十二卷 出来

江戸蓮池菴
爲永春水誌

美中第一の好男子
鳥雅

梅里の女房
於久満

梅里の妹
於玉

春色籬の梅巻之四

江戸

爲永春水著

第七回

枝ぶり見うるしたる梅が香氏羽袖に留て鶯の音も閑
潤ふ春の夜梅田六お熊が河の鶯より流人に先立たぐ
一人殿り来りしかの心神もく休豆の間も立居ぶ
待ち侘て掾側に洗足をさせ梅ヘ湯よりてあるくハまア
ちの掾側へ来り「アイ久しぶりで私宅の洗湯へ送

入ちゃくこうこう竟長湯をして送上ちゃくこと板側へ寄り
梅男の　梅子　安産　なお「アヤ」ーぐろうこうこと いうこと　梅へ左
板ぐらうとッて　伊勢通ー　駕籠でも　旅うら　帰ッて来て八
丁　四人　男八　なぶ　重れのサ　今ふ　表町の　按摩さんが　来ら
ちゃぐトキニ　鳥雅さんや　伊久八　伊勢しこうこのご先刺の
ちゃぐでハ　箱根へ　往こと　往ちゃの　相談ごと　言ちゃぐ　実正の
変ら　なお「アレサ　そこで　ちゃくこれて　ナニ　私が　一人いそひで　先へ　帰ち
ちゃ　ものう　多紙で　左様　やても　ちゃうこうこと　お　茶さんが　余

計に　苦労せ　ちゃうぐらうと　思ちて　多ひで　帰ちて　来ちゃこと子
梅「お　箱根へ　まちる　相談よ　ちゃこと　のご　ノウ　鳥雅さんも　余ど　平
氣なちゃこと　なお「アレサ　左様　お思ひぐと　お茶さんの　子　多遠ひ
であちまショ　江の　鳥ちゃ　ちゃ　箱根の　湯治と　いと　変ふちゃこと
の八　あと　さんの　病氣が　ひぐうこの　ち　対て　その　相談　ちきて
私が　先へ　帰ちこのであちまショ　梅「そ　お　私が　病氣　ち八
伊勢　ち八　ぐちゃ　小児　国茶の　お　湯治　伊勢　病氣が
でちこと八　伊勢ーこのぐらうノウ　なお「イエ　そ　伊でも　海の

鯖で毒虫あたりでも刺さるとのこと何ぞ海の毒よりまさるものか
終日海の湯で遊んで。方へ帰りて寝ると急に悪風がする
おそれで一時だろう眠りて目を覚しぶるぶる側へ往て薬
でもあるものと言うだろう見るを臭ぐ大変よ腹よりて臭きぶ
悪い様子思うまるる〜 何様も変ぐを念入見るるを胸のあと
ぶつぶつ真赤よりて見るるるを拾を明て見るをばるるあと
[illegible] 輪廓て腫よりて居るでありまたくを
うるさい松ばびるるるしてヨヤとのくるぶ要がまと腫を潰して入

悪いと思うて知るるるを自で氣ちが多分るるるるるるるるると何
氣ちが〜 関と知女がおるのあハイ氣ちが〜 何ぐるるるるるるるるの
腫れを腫と所が痛るるて塊へあると知言ぐるるるるるるるるるる
変でばるるると思いきるるるるるるるるるる鳥雅さんもお祝女を記
あて損傷して衣中ふお医者さんを呼びて来りて貰うて二所が
地の様よ自由ふ医者さんがまるるるるるるるるるるるるるるるる
ふ衣の明方ふお医者さんが来て見るまるるるるるるるるるるるる
藤浪が出来るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

さるの癒治するとの事に付て夜が明てから又の六人
もお医者を頼んで別がやう〳〵六人目の方が善と
なりて先ずを腹一て薬瓶のあの板ゝへすると〳〵
代腫物が治り張と云へ変てゝ不行きと思ひがるとて腹
ばう〳〵ゝ中へ遠へ入ろう私が上る墓所もして半日も
早く頭根の湯治へ行て解の山辰日の三日もるとと代腫
物が又胸の所へ首のまわりへ吹出とも新と治癒あの
中ふ湯へ行て瀧みうまるを逆上と氣せ下と胸のも自然と

散て治るうち出も左根するぶいく長八金〳〵山事に
あさ中門と毒と腫毒のあるぶ出来ぶ出るうち長延ると八
別あるとの〳〵於五女八十と頭の腫くこのを鏡で見て驚て
ぶつて治てお生ぶ子鳥雅さんもお紀女も梅里さんへ行て
病気で連て帰りて八濟るひ〳〵山方へ知ら長ぶて方く一の
変ぶあると時へ猶きあぶさんでも鎌倉中のお医者が
飽いるこのを只一人薬をお呉の玉医者さるの言のを聞ぶて
湯治ゝ不行ゝ放ぶ帰りて来るも浅要去ぶうのぶでも癒治ゝ

梅里

おくみ

年一ざと評義を極てそれから私も同伴して湯治場まで送て往て二日のろくハ葉ばらもるるから於玉女と分て居ましたが扨ハ湯治場の相撲する振で思ひの外に元氣が出ておまへがたの飛てものるに全快まで二週間ほどの三週間も郷方が恋らしくなる相撲ばらく私だろう帰りて来ましたが又おれたんだがそこへ又おれたんだが島雅さんを進めて旅に日をるに振る堀藤で急角本家へ帰るのを遅くする振で先成ざとろう仏様も合点がいきませんヨ全体ハ島雅さんが此初ろせて先へ帰りて来藤とおもの

於花女ろ不義初を言て来ちゃと新蓮が分て居るから全ばろ
でまるひが島雅さんがおまさんハ分ておいでなくハ振ろうんハ
風へてもるるらんとのハ一松ま御藤が松の居るを紙
幸ひまして仏を先成ばろ初ま分ろうハ時も
ようく帰て成ろて来ましたが早く来ましたが紙
温泉ハ宅ハ知を先成ましたねハト矢ひまばろ梅里の藤を
視る湯上りの樣子身ハ一ばろの上ハ赤ろ藤ろ藤ろれるる
風もろく日ハ中けば藤て来ましたが顔の姿婦るが生るるれバ

久しぶりで見て梅里ハ襦袢で放心と身に持綱衾を逆緒し

梅「ホイ夫ハありがたい。ぢや何でも安心だ 名「ヲヤ何が安心で出

きるものかね 梅「ヱヽナサお前が他人より早く帰つて来るからヨ

名「アレサお前様戯言ぢやアありませんよ。お玉さんのお手ハ

お案ドでハありませんのえ 梅「ナゼお玉ハ脇指のくとのへでハ

無いか此身ハ何よりかお前の顔を見るのが安心だ 名「ヲレヅ

寮さんハ気味のいゝ事を云ふ小児を欺し様な事を云

で何ぞ私に気休めを言つて油断をさせるのぢやアありませんか

梅「アヽヽヽ帰つて来るとモウそろそろしなぢやるのか 名「ヲヤ何ぞへト

梅里の顔を自若と視る 梅「ナニサつまらねへ嫉妬をモウそぢやる

のぢやアねへのサ 名「ヲホヽヽヽそれだろうでもお前さんが何ぞアやさしく

お言だらう 梅「何やしひと言のうち呆るヨそれよりか宵早夜具を

着て其風を引ハナ 名「ホンニ左様でござりますしかけト言ながら

立て下女が出し置たる常着の小袖縮緬の茶辨慶黒襦子

の半衿かけたる絞り浴衣の上へ引かけて 名「旦那へ 梅「ハイ

何ぞ御用ござりまし窓のいる二三寸の間をそ返るをすれば 名「ヲヤく

いつの時のころより甚所へお這入あそばされ所を成しでござるまに
エト選て見まづ梅里八女の小神と文芸所風呂場へ色〻ふみて
居る内お鶴八あやしく思ひちらつかを見る所視知らぬ
芸を衣類あまたに入なるへ〻そまた八離人のでござる
半兵ヘトのへより早く風呂場色を引摺り中をあけて なるへ〻
好意を召るものゞト顔を変へて洗ぐ所 梅〻〻〻此衣裳
を見て法類を するのゝ なるへ〻そまたもお林さん私ゞ此のゆ
ゝくの尚寺 ぐゝゝとひけて此根なるものを家内へお置あそばす

あれでも彼ぢやア あやまる甘んゝト身をゝゝハして泣て居る
とまた 此番の衣類ぢとゝて 彼小濱の不動番ゝ さて
小濱とゝ島八ひそゝふ おれとおゝの変を関て 根詰し
兎ても左様ス男のゝが 居るを おゝ〻とゝして此家ゝ
島雅と 揚り 帰る 来るを待てあらんも私ゝ 梅里
ゆへ そまたとゝく世話よるのゝ 紙の義あまたバまゞ行ふへ
ゝりとも 仮住居 ゝ ゝく 戸 吉 両女 ゝ 食の 都合
あてあまたバ 所 春の通 ゝ ふ 仕 見 ゝ ふ 言ける

梅里の[illegible]も一旦[illegible]招[illegible]て後よろしき[illegible]

あるべし島雅の濱の夏八[illegible]

玉の夏八血縁の[illegible]夏[illegible]島[illegible]人[illegible]ゆくき

道理[illegible]哉邪[illegible]

元来[illegible]島の奥に対て八梶屋家の[illegible]公[illegible]頼[illegible]金も

[illegible]其好[illegible]任せ濱の見[illegible]家を借[illegible]て家

[illegible]を頂へ今朝[illegible]家へ二女[illegible]引移[illegible]れた

[illegible]衣類が梅里の許[illegible]殘[illegible]島雅[illegible]

梅里[illegible]を頼[illegible]て別[illegible]後お[illegible]八おぬを宅の妹の

[illegible]する[illegible]小濱の夏も[illegible]島の

夏も[illegible]関せて[illegible]しげ[illegible]命[illegible]両女の[illegible]

[illegible]お祭[illegible]夏[illegible]明のお祭[illegible]れ

[illegible]神[illegible]奥の[illegible]寺の[illegible]移[illegible]屋[illegible]れば

文の衣類[illegible]紙見て[illegible]娘妹の[illegible]て数[illegible]屋

[illegible]

梅[illegible]お祭[illegible]夏[illegible]人夏[illegible]腰を[illegible]

「ナニ腰を立てゝ居て お柔さんが左根の人氣人
梅 コレサ〳〵不習遠ひを して後日笑ひ草さんなる此衣
裳るゝば立れる情人のある婦人のごとく かゝる〳〵乳を
もむ真ハるゝへ 左根サ お柔さんを情人ゝすゝバ 達人
でも私〳〵ゝハどぎわ さんのサ 梅 お是ハ ちゞり 左根先
潔るゝ ちゞりで よく〳〵聞るヨ 此る中 お柔の 曲寄ゝ人
ちゞも義 集のゞ 二人来て 居て 此身ゝ人 仏根ゝ問〳〵せ
たらう 豈ゝ よゝ 切ゝ ゝナ

第八回

梅 ヲイ〳〵お 勢よく 考へて ちゞり お柔が江の島へ 行ゝ 曲寄の
間ゞちゞ 何も 他の 女を 家へ 引ぎ 込 此ゞの 家業をする
馬森と 思ひて 異る 変も るゝへ 此衣類ハ お柔も 生ハ 知て
居るゞちゞ 元ハ 和泉町ゝ 唄女をして 居ゝ 中濱とゝ人のゞちゞ
「ヨヤ 其時分 ちゞ お初原ゞ ちゞ 家内へ 呼んゞを 此ゞの
ゝ 梅 コレサ 半ち 口を ちゞ 根人 中ゝ 左根先ゞ ちゞを するちゞ 此
根人ゝ 此身ゝ 此ゞの人 変をよく 聞て ちゞ 腰を 立ても 最 如 此 ちゞ

伝なる其人なる「ナニ兎ても私が伝と思ふことを手紙に久しく
お別屋の方ゝゝゝバ訪ね不及夏てあるまゝ伝ぶ不見ぶ
神人私ゞ心の中をもおもるしナて伝すも一途に野暮な生
涯で　梅一ヲイ〳〵コレサ　衣類の勝が乱ぶ
ちて注意も強ト手紙で居る　梅里の風情に当惑ハ
悔〳〵勝に すぶ〳〵て　身体ふハ〳〵注て居る由ふ　梅里ふ
ゝゝ小演と伝鳥の変ふハ〳〵　梅ゝゝ　お花お丸と　お今也
和合さちるふ　ちゝひを伝ふ　伝ふ　頼むよう　言ふ

いゝぶ　手分ハ　親ひの　伝ふて　「ゝゝ　お春さんの　伝の八　當ふ成
ませんョそまぶけまぶも　忠さんの　ゝ鳥さんと　やしレハ　実ふ　ハ望
ませんが　ゝ小演　さんとゝらハ　ゝ　お春さんの　情婦ぶ　梅一そん
ゝゝバ　左様　思ふて　居る　女人　抜て　虎人ぶ　帰ふて　来まバ　解ゝぶ
ゝ鳥さんの　変ハ　お屋敷の　中　母公さんゝ　三百両　ゝ　金を　預て　八
居ゝ　姉の　変ゝ　此方の　勝ふ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
義理の　ゝ　ひ　抜て　思ふ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
宜ゝ　ゝ　ゝ　実ふ　お玉も　お屋浦の　ゝ　素人ぶ　ゝ　ゝ　ゝ

心配して居るのサ　ヲヤ　唄女あげくるも私の振る野暮であるて
まるハ　梅　ナニお流の人男おうきぐるを去て　盃のごとトいふ新く下女
の型が勝るよりなの間へ来て　旦那さん婦美川の舞楽
さんがおかるさるきくと　梅　ヲヤ左様ろ此方人お通をるさるまうと
言ふ　さん　ハイト言て扨お慈ハ顔を拭て衣類を着直し　帯紙
ゆて姿をつくろふ　梅里ハ三度くの間へ来る小腰をかゞ
めて　破毒樂ハ　障子の際へ来て
ます一脈見ハ有ぐらふぞ　梅　ヘイ旦那此方ハ出ぐるハ
ぐまた宮ホ　お果くで名是入まるトき是

突バ　梅　よく〳〵おお出成と言て　此間　送入る世　サア〳〵
此方へ〳〵一脈見ハ大きく毒抜ふ有りやくトのふ折ふ　さんハ
薬を持ふ多参粉盆を直ル　梅　ヘイ是ハ有ぐらふぞるま
す　梅　トキニ此る中ふ小演が数度お流の世話ふ成ることふ
ふ〳〵今朝引就しぐさぐ　穂〳〵みとを言て月をこのむ
変さらふ氣の毒ふ此身もあるふ　注て生るまぐぐが　飯内
ゆも急ふ用が出来て　注是ひろう　梅　ヘイナニ今日旦那が
死る入まひでも宜ぐざるふ　ませうが急ふ　私が上をまるこのハ

小演さんが何振しても喫女子で出るうち相模屋の西宮の表
左振のうて吳まう今日吳服相談を極度とせうーみく
お顔でどざるもんが何振りさうものう島波貴殿へ対
ヤホ上をまーと　梅ヘテラ〳〵其振るとこハ上ぶ〳〵あ稽て
亜て吳る何もるよ手振る真似をるひでも解身ぐハナ
ア〳〵程ようく命ぐ沢て日を延して亜て吳るまーう、旅へ出る
連中も得うて来るうち時のたまり子ハ行度もんぐ　高八工
そまとヤまぐるもお二女ぐうち義藤のホ手齢ハう孫子小演

さんハ二三年以前引込時分彼も地でも流人惜しーうと喫女流
でどざるもーとうち中　私ども出うう遠入うう交成のを者と
ものや以前うち初月さものう赤ちちホ進めう稽みでどざるもんぐ
そまとホ　お鳥さんうを再勤の左度子新橋で連て相談でうを
おこひるさうるものうち中裏の者も聞付て彼是言ハで歩る
もー小演さんもお鳥さんも金ハ借ぶともいくこのーー
娼妓屋の勝手ホうるひうち二の足を踏で度ぶけぶでる人う
うで両女が十分の衣裳で出振ものるぶそやヤもう　大文

梅里
ちく木

素楽
梅里我
ひの下駄彩を
頼まる
寺楽

文でござるまらう　押出しても見度　振袖もんでござるまら
のサア　梅　アヽ　お孫　まだ少し　働やる　仕ごろ　成程場所
ごろうらうの　冥利ハ出し　成と　男人も　古地の　あごろう　時も
あのあの　あの　両女を　左振して　何振も　此身ぶ　濟　極ト　言所へ
なる　なる　お　結振をして　出まる　姿　年場と　又　ども　あざやかふらく
おきくの　戦栗とする　なごろう　なア　素　樂さん　けるへ
ひさ　久ーく　お目ふらるひわ　人　今見よく　お左　成と　子　まへ　イ
こまハ　何時の　ちろう　お　帰　久　でござるまらに子　まご　米　文が　帰
ま

ませんの　ふ　見　那ぶ　何ごろも　お　ちゃ　ふ　振　ませんの　ふ　ま
そんと　まーまんぶ　何時　お　帰　久　なる　ま　ふ　ふ　梅　アヽ　ハ　今
帰ろて　湯人　迎入つ　ごろう　ぶ　ナ　寿　アヽ　左振　でござる　まらう
ぶ　ぶ　理で　誰人も　お　帰　久　なる　ま　ふ　ふ　ま　ま　ま　ま
流人さんも　まう　直に　久　アイ　私ごろう　先へ　帰　久　来　き　人
何振も　見那ぶ　湯ぶ　ごろう　ぶ　ごろう　ぶ　ごろう　ぶ　ごろう　ぶ　帰　久
まーこまーの　間家を　あけて　さ人　寄　早　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
ト　言ごろう　勝　直の　方へ　頭　久　アヽ　お　今の　と　早く　と　左振

言つてきんをヨトのひつて又寿郎樂よ向ひ　多「寿郎きん六素が
ろうよ　同伴よ江の湯へお出なさるろ　冥さ隠がどうよりおすろく　ほんで
来ますしたハ　寿「左様でござるまし　こちらうとも此後ハ新参と
よろしくお東世　来年爰が大仕合でござるまして　代つとまろう　具那がお出る
きるとこなたらう由次郎さ　私ろお供をするちがふ　頼ひ　ヤて
参ります　多「ヤ左様久　其中へ名見湯の衆さんと入て
お休も由うんと　嬉敷をしてのがらお出なさるバの　素「アヽ
イエモリ　私ハ第次ろの　情合人　具ひ切るつもりでござるまして

多「ヤ　ヨボ　寿「エイエ　金を私がお客よ　ものでらまして
出ふ　ひてよう　町へでも参るつもりでござるまして　ト老実ふ
ひバ　梅里もお無も　吹出して笑ひ　多梅「アヽ
多「おうしの様人　具那人　梅「エ　多「ろんとうよ　素さんと里うんを
情人でござるまして　梅「さるバサ　金を　和合うろ　実　正
も　紀ご様人　寿「イエモシ　具那　和ふ　親を　しまる　梅よ　ろ
てござるまして　多「ヤ　お休ハ今思ひ切を
お土産ハ　ヤ　寿「イエ　ちまでも　参り　ひよろ　ござるません

う　梅「アハ〳〵〳〵何のまでも老実な中が可笑ト申す訪へ
お鍋が言分て　やアて〳〵と男ハ〳〵酒肴紙お三ハ左様へ運び
きまる　女「サア寿樂さん一ツおあがりなさ　寿「ヘイ〳〵ハ有がとう
ぞんじ　吉「ト申ますより　あぐらを組り　〳〵
申すを初めに　〳〵　勢ゐ　梅里の本宅を清維〳〵忠兵ハ
臭も せず〳〵　此所へ　忠兵衛　直ぐ　此席へ　忠「ヘイ今日ハ
ヲヤ　師匠さん　此る中ハ　女「ハイト言ながら顔色よう成て見て
女「ヲヤ〳〵　臭を切て　頼まれ　隠り　何様か成さの久

梅「イヤ　途中で何様ぞこのる　忠「イエナニ左様ぞハ〳〵ぞんじません
鳥雅さんが箱根へ　花脚を　紙を見ると
直ぐ　花んで　参じ　〳〵　女「ヲ何ぞ大変ぞ　変てる　此来さの
ぞ　忠「ヱイ　お玉が　新氣で　師上さんが　先へ　あちらを
お　あ　此で　ひぢ〳〵見脈ぐ　〳〵て来さの
鳥雅さんも　吾　氣で　動止　家ハ分て　温泉所の医者よ　か
つて　来て　貰て　と　〳〵　根ハ　病ぐ　私よ　立て　来て　居ると
〳〵状で　ぐ　何様　〳〵　梅「イヤ　大変

なんとしても直ふ立て行ぐようなく　梅へそまぐちやア松ぐまこと
さて徒させうう新巻さんや米麦さんが対てハ居ませけと
どもまお茶ぐさそ熟をもんで居ませどうう　梅へナニお茶ぐ
又祇つことの用て両個の熟熟ろよくるるのん道理もるひ
うう　ア　此も早く思こうを歩る方ぐおるも熟ぐ丈夫にるる
だらふうう左根して賛ふ　梅へ左根るう直ふ唯今うう
支度をのこして　梅へ左根サトおし考へ　梅へるんと考楽
さん余ぐ多る　ぐぐがお茶直ふ此男子と温泉場へ行て

遣て居うちハ出来次ういう　梅へイイ行ようこしをひぐくお楽し
成ことで私る成程桜ぐ出来ませんうう　梅へ居ませこと程の
支てでどるまるうう　梅へ役ようるるも直ふ出程をいこしませう
梅へイヤ是ハ早速の直業紹で難るる行幸お願ごト
あるようう思こ楽の二八此頃居ようて支度を用へ
表ひで旅ようおりひきけやと
○是芸者新間を酒の損ま撥ふの伽ようる公沢を居ること
まうハあやまううう町家ハ元来武家ようても新間の類を

愛―[illegible]八氏葉―常に滑稽おろしもの[illegible]所[illegible]と
[illegible]根多[illegible]ども[illegible]変だろうとあらば方[illegible]に変所[illegible]
[illegible]郷方の間を[illegible]と[illegible]すると世[illegible]の外老[illegible]
役を勤め如[illegible]ける[illegible]大家の且那も大夏の用紙類を[illegible]
[illegible]除―[illegible]と[illegible]―[illegible]夏

春色雜の梅巻之四了